

アタヤル語群において冷感を表す語の再建

落合いずみ

(受付 : 2022 年 4 月 25 日, 受理 : 2022 年 7 月 25 日)

Reconstruction of the words for coldness in Atayalic languages

Izumi OCHIAI*

摘 要

アタヤル語 (オーストロネシア語族アタヤル語群) の「寒い」を表す形式には *gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*tələtu* 型の 3 つの型が見られる。それぞれの型について、アタヤル語と系統的に最も近い言語であるセデック語における同源語を特定し、それぞれの型の起源を探る。まずアタヤル語の *gəhiraq* 型については、Rinax 集落 (ツオレ方言系) に見られる *gihaq* 「北」に関連がある。セデック語における同源語は *rihaq* 「山の裏側」である (アタヤル語群祖語は **Rihaq* または **Rihaq*)。Rinax 集落における「寒い」はそこから派生された *ka-gihaaq* である。早期の形式は *ka-giha<ra>q* と再建され、語根 *gihaq* に対し化石接尾辞 *<ra>* が挿入されたと考えられる (その後 *r* は同一母音間で脱落)。他の集落においては *giha<ra>q* となった後で *r* が *y* に変わった。そしてさらに前次末音節の母音が弱化し *gəhiyaq* を得た。この語は「寒い」としては形態的にも意味的にも改新を経ている。次に *məsəkinut* 型については、セデック祖語に **səkəy* と再建されうる形式があり、意味は「寒い」である。これはアタヤル語 *məsəkinut* 型の高祖語であり、アタヤル祖語では **səkəy* の語尾 *y* を削除し化石接尾辞 *-nut* を付加した。アタヤル語群祖語において本来「寒い」を意味した語はこの **səkəy* である。最後にアタヤル語の *tələtu* 型はセデック祖語の高祖語に **tə-ləətə* (後に **tə-ləətu* に変化) という高祖語があり「冷たい」という意味である。アタヤル語でも *tələtu* 型は本来「冷たい」を表していた。以上よりアタヤル語群祖語における「寒い」は **mə-səkəy*、「冷たい」は **tə-ləətə* と再建される。

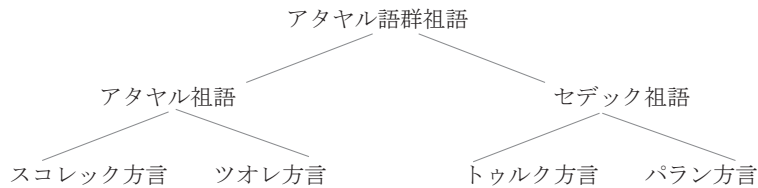
キーワード : アタヤル語 セデック語 寒い 冷たい 山の裏側

1. はじめに¹

アタヤル語群は台湾で話される言語群であり、アタヤル語とセデック語の2つの言語を含む。台湾には十数にのぼる先住民族がいるが、アタヤル族・セデック族もそのうちに含まれる。アタヤル語群をはじめ台湾における

先住民族の言語は全てオーストロネシア語族に属する。小川・浅井（1935：21、559）によると、アタヤル語はアタヤル語スコレック方言とアタヤル語ツオレ方言の2つの方言に大別される。セデック語はセデック語パラソ方言とセデック語トゥルク方言に大別される（図1）²。

図1 アタヤル語群の系統樹



本稿の目的は、セデック語との比較を基に、アタヤル語の「寒い」を表す形式に見られる3つの型の由来を探ることである。まず2節ではセデック祖語において「寒い」を表す形式を再建する。3節では李(1996:211)によって宜蘭縣におけるアタヤル族の諸集落において収集された「寒い」を表す形式を概観した上で3つの型、*gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*talətu* 型が見られることを指摘する。さらに4節では李(1996)よりも約80年前に佐山(1983a、1983b（初出は1918、1920）)によってアタヤル語の分

布域全体で収集された「寒い」を表す形式を概観し、同様の3つの型が見られることを指摘する。但し、「寒い」に対しアタヤル語には3つの型が併存しているは考えにくく、それらのうちどれか1つが本来「寒い」を表す語であり、それ以外は別の起源をもつと考えられる。5節では *gəhiraq* 型が「山の裏側」に由来することを述べる。6節ではセデック祖語において「寒い」を表す形式がアタヤル語において「寒い」を表す形式の1つである *məsəkinut* 型と同源関係にあることを述べ、この形式が

¹本稿は北方言語学会第4会大会（2021年11月7日、オンライン）において行った研究発表を基にしている。この研究発表の際にご助言をくださった方々、また本稿の草稿にご助言をくださった方々に感謝する。ただし本稿の不備は筆者のみに責任がある。

²音素筆者のフィールド調査（2018年から2019年にかけて）によるとアタヤル語スコレック方言の音素は母音 /a e i o u ə/、二重母音 /aw ay uy/、子音 /p β t k ʔ q ʔ s x h z r l m n ŋ j w/ であった。/β/、/ʔ/、/j/ は表記上 *b, g, y* を用いる。母音 *o* と *e* はそれぞれ二重母音 *aw* と *ay* に遡ることがこれまでの調査において観察できた。Huang（1995：16-17）におけるアタヤル語ツオレ方言の音素目録によると、アタヤル語スコレック方言の音素目録と異なる点は子音 /ʈ/ を持ち、母音 /ə/ を持たないことである。/ʈ/ は表記上 *c* を用いる。

また、筆者のフィールド調査（2011年から2020年にかけて）によると、セデック語パラソ方言の音素は母音 /a e i o u/、二重母音 / uy/、子音 /p b t d ʈ k g q s x h m n ŋ l r j w/ である。母音 *o* と *e* はそれぞれ二重母音 *aw* と *ay* に遡る。月田（2009：56-62）によると、セデック語トゥルク方言は母音 /a i u ə/、二重母音 /aw ay uy/ を持ち、子音の音素目録はセデック語パラソ方言とほぼ同一だがセデック語トゥルク方言では /ʈ/ が無い。

なお、本稿におけるセデック語パラソ方言のデータは筆者のフィールド調査からである。セデック語トゥルク方言とアタヤル語のデータは先行研究からの引用である。その場合音韻的表記に近づけるため、先行研究の表記に対し本稿筆者が多少の変更を加えていることがある。

本来アタヤル語においても「寒い」を表していたことを述べる。7節ではアタヤル語において「寒い」を表す別の形式である *talatu* 型が「冷たい」に由来することを述べる。

本稿における冷感を表す語彙「寒い」と「冷たい」の区別については、安部（1985）による体の全部、体の一部という分類方法を用い、体全体で冷感を受ける場合（話者の置かれた環境の気温が低い場合など）は「寒い」、体の一部で冷感を受ける場合（例えば水や食べ物などの物体に触れ、その温度が低いと感じる場合など）は「冷たい」とする。

2. セデック語の「寒い」

アタヤル語において「寒い」を表す形式には3つの型が見られたが、セデック語の方言間における形式は一致している。「寒い」を表す語根はセデック語パラ方言では *sekuy* である。セデック語トゥルク方言では *sakuy* である（Rakaw 他 2006 : 777-778）。これらから再建されるセデック祖語の形式は **səkuy* となりそうである。ちなみに Ochiai（2018a : 24）によると、セデック語パラ方言では、次末音節におけるセデック祖語の母音 **ə* が *e* になる変化（一種の強化）が起きた。

もう1つセデック祖語として再建されうる形式があり、それは **səkəy* となる。この形式では語末音節の二重母音における前部要素が **ə* である。落合（2022 : 116-117）はセデック祖語の母音体系として単母音 /**a, *i, *u, *ə*/ と二重母音 /**aw, *ay, *uy, *əy*/ を再建し

ているが、Ochiai（2018a : 26）によると、セデック祖語の語末音節における **ə* はセデック語パラ方言とセデック語トゥルク方言の両者において *u* に変わる。セデック祖語の語末音節における二重母音 **əy* の前部要素としての **ə* も同様の変化を経たことは落合（2016b : 302）に見て取れる。そのため語末音節における *u* は二重母音 **uy* の前部要素も含めて **u* に由来するものと二重母音 **əy* の前部要素も含めて **ə* に由来するものがある。祖形は **səkuy* と **səkəy* のどちらかということになる。

本稿ではアタヤル語群祖語の祖形として再建されうる「寒い」の祖形は、語末音節二重母音の前部要素が **ə* である **səkəy* だと考える。その根拠となるのがアタヤル語において「寒い」を表す1つの型として挙げられる *mesəkinut* 型であり、アタヤル語のこの型において子音 *k* の直後の母音 *i* が **ə* に由来する可能性が高いことであるが、これについては6節で詳述する。セデック祖語のある段階において **səkəy* の語末音節の二重母音 **əy* の前部要素が *u* に変わり、**səkuy* となった。表1にセデック語のそれぞれの方言における「寒い」の形式とその再建形をまとめた。

また、セデック語パラ方言とセデック語トゥルク方言の形式はともに語根の形式を示している。実際に「寒い」と言うときは、静態動詞を表す接頭辞 **mə-* を付加する。そのためセデック語パラ方言では *mu-sekuy* となる（パラ方言では次末音節より前の音節における母音は *u* に変化する）。セデック語トゥルク方言では *ma-sakuy* となる。

表1 セデック祖語の「寒い」の再建

セデック語パラ方言	セデック語トゥルク方言	セデック祖語
<i>sekuy</i>	<i>sakuy</i>	<i>*səkəy</i> > <i>*səkuy</i>

3. 宜蘭縣におけるアタヤル語の「寒い」

李（1996 : 211）は宜蘭縣における15のアタヤル集落において収集した基礎語彙を挙げているが、その中に「寒

い」も含まれる。15の集落は8つがアタヤル語スコレック方言系の集落であり、残りの7つがアタヤル語ツォレ方言系の集落である。そこに挙げられたデータを表2に示した。表2中の表記には、子音連続間に曖昧母音を明

記するなど本稿筆者が形式の表記に多少変更を加えた。また集落順も分析しやすいように並べ替えてある。左列が集落名、右列が「寒い」を表す形式である。図2は李(1996)に付録の地図を参照に作成した宜蘭縣におけるアタヤル集落の分布を示す地図である。図2のデータから「寒い」を表す語には3つの系統があることがわかる。

ここではそれら系統を型と呼ぶことにする。それぞれの型に含まれる実際の語形の現れには若干の違いが見られる。議論を進める上で型を指し示す統一した形式が必要となるため、それぞれの型について *gəhiraq*、*məsəkinut*、*talətu* という形式を代表とし、*gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*talətu* 型と呼ぶことにする。

表2 宜蘭縣のアタヤル族集落における「寒い」

スコレック方言 集落名	「寒い」	ツオレ方言 集落名	「寒い」
Pyanan	<i>gəhiraq</i>	Skikun	<i>hiyaq</i>
Lmuan	<i>gəhiraq</i>	Mnawyan	<i>hiyaq</i>
Habun Bazinuq	<i>həzaq</i>	Mkgugut	<i>məsəkinut</i>
Syanuh	<i>hiyaq</i>	Pyahaw	<i>məsəkinut</i>
Rghayung	<i>hiyaq</i>	Ryuhing	<i>məsəkinut</i>
Kubaboo	<i>hiyaq</i>	Mtlangan	<i>məsəkinut</i>
Kulu	<i>kələtu</i>	Knngiyan	<i>səkinuc</i>
Haga-Paris	<i>talətu</i>		

図2 宜蘭縣におけるアタヤル集落の分布



3.1 *gəhiraq* 型

アタヤル語スコレック方言の集落では2つの型が見られる。1つが *gəhiraq* である。これと同一の形式は Pyanan 集落と Lmuan 集落に見られる。この型はほかに

も前次末音節が脱落した *hiyaq* という形式も含まれる (Syanuh 集落、Rghayung 集落、Kubaboo 集落)。アタヤル語の本来のアクセント位置は、小川・浅井 (1935 : 22) に「普通語末より第二音節に高低揚音を有す。当該音節

に中間母音ある時、又は語末に長音或は声門密閉音ある時は語末揚音を存す」という記述がある。そして、アクセント位置より前の音節は音声的に弱くなり、母音が曖昧母音に弱化する変化が起きると述べる。また、この *hiyaq* の例のように前次末音節やそれより前の弱い音節はそれ自体が脱落することもあることは落合 (2020a) などで述べられている。

また *gəhiraq* 型には語中の *y* が *z* で現れる形式 *həzraq* も含まれる (Habun Bazinuq 集落)。この子音はアタヤル祖語の **r* に遡り、アタヤル語の方言または方言内の下位方言によって反映形が異なる。Li (1981 : 264 -265) によれば、**r* が *r* として保存されている (下位) 方言は少なく、ほとんどの場合において *y* に変わったが、*r* から *y* への変化の中間段階である *z* で現れることもある。

また *həzraq* では次末音節の *i* が *ə* で現れている。歴史的に考えると、アタヤル祖語のアクセントは次末音節に置かれていたと考えられる。そのため、本来なら次末音節より前の音節において母音の弱化 (曖昧母音化) が起こるのだが、ここでは次末音節に過度な母音弱화가適応されていると考えられる。Li (1981 : 239) によると現代のアタヤル語では次末音節または語末音節にアクセントが置かれ、個人によって差が見られるとする。この例では語末音節にアクセントがあるのだろう。そのため次末音節が音声的に弱いと考えられ母音弱화를引きおこしたと考えられる (4 節も参照)。以上をまとめると、この型のより早期の形式は **gəhiraq* となる。

3.2 *məsəkinut* 型

表 2 におけるアタヤル語ツオレ方言の集落の形式について 2 つの型が見られる。1 つはアタヤル語スコレック方言の集落にも見られた *gəhiraq* 型 (早期の形式は **gəhiraq*) であり、前次末音節の脱落した *hiyaq* という形式が Skikun 集落と Mnawyan 集落に見られる。もう 1 つは *məsəkinut* 型である。Knngiyān 集落ではこの形式とほぼ同一の形式で現れる。ただ語末子音が *c* [tʰ] として現れている。筆者のスコレック方言のフィールドワークでは語末の *t* が音声的に *c* [tʰ] として現れる傾向がみら

れた。Knngiyān 集落の語末の *c* はそのような音変化を経たのだろう。それ以外の集落 (Mkgugut 集落、Pyahaw 集落、Ryuhing 集落、*məsəkinut* 集落) では語末子音は *t* である。また Knngiyān 集落以外の集落では接頭辞 *mə-* を伴った形式である *mə-səkinut* として現れる。この接頭辞は 1 節において述べたように、例えばセデック語トゥルク方言で「寒い」を表す形式 *mə-səkuɣ* についている接頭辞と同一のものである。

3.3 *tələtu* 型

アタヤル語スコレック方言の集落に見られるもう 1 つの型が *lətu* である。この形式は Kulu 集落の *kə-lətu* と Haga-Paris 集落の *tə-lətu* の語根として含まれる。語根 *lətu* の前部にある *kə-* と *tə-* はともに静態的な意味を表す接頭辞である。この形式はセデック語に同源語があり、セデック語パラン方言では *tu-leetu* と言う。セデック語トゥルク方言は Rakaw 他 (2006 : 423) において *tə-lətu* である。セデック語におけるこの語の意味は「寒い」ではない。この語は「冷たい」を意味する。例えば水が「冷たい」と言う場合に用いる。

セデック語の 2 つの方言における同源形式を基に、セデック祖語は **tə-lətu* と再建されそうである。ただし、落合 (2022 : 118-119) によると語末音節における母音 *u* はセデック祖語において **u* に遡る場合と、**ə* に遡る場合の 2 つがある。つまり、セデック祖語における語末音節の *ə* は、パラン方言とトゥルク方言の両方において *u* に変わった。パラン方言とトゥルク方言における語末音節の *u* が、**u* か **ə* のどちらに遡るかを判断できるのは接尾辞の付いた形式であり、この場合は歴史的に古い音素で現れる。パラン方言において接尾辞の付いた形式は *tulute-i*「冷たくしろ」となる。ここでは語根末母音の *u* が、接尾辞の付いた形式では次末音節に移動し、さらに *e* に変わっている。Ochiai (2018a:24) に述べられるように、パラン方言において次末音節の *ə* が *e* に変わるという一種の強化が見られる。この変化を経たと考えられる。そのため語根末母音は **ə* に遡ると判断でき、セデック祖語は **tə-lətu* へと修正される。ここから語根末母音の

*ə が *u に変わり、セデック祖語後期では *tə-ləətu に なったと推察される³。

上述のようにセデック語では「寒い」(セデック祖語 *səkəy) と「(物体が) 冷たい」(セデック祖語 *tə-ləətə (> *tə-ləətu)) を形式的に区別する。アタヤル語でも本来 *tələtu* は「冷たい」を意味していたが、それが次第に Kulu 集落と Haga-Paris 集落では「寒い」の意味としても用いられるようになったのではないか。この点に関して 7 節で再度取り上げる。

ちなみに、これらの集落の形式に見られた接頭辞は *kə-* (Kulu 集落) と *tə-* (Haga-Paris 集落) だが、セデック語と共通して用いられるのは *tə-* のほうである。しかも Egerod (1980 : 729) においても、小川 (1931 : 241) においてもこの形式に相当する語はそれぞれ *tru?* と *tələto?* と表記されており接頭辞が *tə-* である⁴。そのため本来語根に付いた接頭辞は *tə-* と考えられる。

Kulu 集落ではそれを *kə-* に変える改新が起きたのだろう。この接頭辞は静態動詞を表す接頭辞 *mə-* と対を成し、同じ静態動詞を表す接頭辞の *kə-* であると考えられる。前者が已然相を表すのに対し後者は未然相 (命令形や否定辞の後に用いる形式) を表すという違いがあるが、

Kulu 集落の *kələtu* では接頭辞 *kə-* が已然相として用いられている。

3.4 小結

ここまで宜蘭縣のアタヤル集落では *gəhiraq* 型 (早期の形式 **gəhiraq*)、*tələtu* 型、*məsəkinut* 型の 3 つの型が見られることが分かった。スコレック方言の集落では *gəhiraq* 型と *tələtu* 型が見られた。ツオレ方言の集落では *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型が見られた。どちらの方言にも見られるのが *gəhiraq* 型である。これら 3 つの型とそれぞれの型を持つ方言の対応を表 3 にまとめた。スコレック方言の集落で見られた *tələtu* 型はセデック語の同源形式との比較から、本来「寒い」ではなくて「冷たい」を意味する形式であったと予想される。その他の *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型についてはそれぞれ 4 節と 5 節で考察する。

本節は宜蘭縣におけるアタヤル集落に限って「寒い」の形式を議論したが、次節では 20 世紀初頭に収集されたアタヤル集落の分布域全体における「寒い」の形式を取り上げ、それが宜蘭縣で見られた状況とほぼ同じであることを確認する。

表 3 宜蘭縣のアタヤル語における「寒い」の方言による形式の違い

宜蘭縣スコレック方言集落		宜蘭縣ツオレ方言集落	
<i>gəhiraq</i> 型	<i>tələtu</i> 型	<i>gəhiraq</i> 型	<i>məsəkinut</i> 型

³ただし、セデック語トゥルク方言において接尾辞の付いた形式は Rakaw (2006 : 423) に *pəsətəlu-i* 「冷やせ」として挙げられている。期待される形式は *pəsətəla-i* であり、これでは語根末母音 *u* が *ə* で現れるのだが、実際の形式において語根末母音 *u* は、接尾辞がついても *u* のままで現れている。これはこの語において、語根末の母音が歴史的な *ə から *u* に変わった後で、トゥルク方言では *u* に変化した形式が、基底形式として定着し、そのため語根末の *u* に直接接尾辞を付しているのだろう。類似の現象は Ochiai (2018a : 25-26) にも見られる。

⁴小川 (1931) も Egerod (1980) もアタヤル語スコレック方言を収集した語彙集である。両方の形式において語末に声門閉鎖音が表記されているが、これは本稿では音声的な現れで音韻的なものではないと考えた。Egerod (1980 : 729) では何故か語根の語頭子音 *l* が *r* で表記されている。また小川 (1931 : 241) では何故か次末音節の母音 *ə* が何故か *a* で表記されている。意味に関して述べると、Egerod (1980 : 729) では「寒い」と「冷たい」の両方の意味を指し示す例文が挙げられているが、小川 (1931 : 241) では「冷たい」のみの意味が挙げられている。

4. 二十世紀初頭のアタヤル語の「寒い」

佐山 (1983a, 1983b) にはアタヤル族の分布域全体において各集落から収集した語彙集が含まれるが、その中に「寒い」の項目がある。表4はそのデータを示すが、順番や表記に修正や追加がある。本稿ではまずスコレック方言かつオレ方言かに分けた。因みに Mb'alā 集落と Mesaulay 集落はスコレック方言とツオレ方言が混合した集落である。表中で☆を付けた集落は表2の宜蘭縣のデータと重複して現れている集落である。集落名の右隣の列は佐山 (1983a, 1983b) における実際の表記 (カタカナ表記) を示した。左列ではカタカナ表記を基に本稿筆者が音韻的解釈を加えた音韻的表記を示した。例えばアタヤル語では母音の長短は弁別的ではないのでカタカナ表記において長音で表されている音声は長母音ではなく単母音で示した。またカタカナ表記の多くで語末子音の *q* が「ク」で表記されるが、カも見られる。「カ」の場合は直前の母音 *a* が子音 *q* の後でもエコーのように

音声的に聞こえたためだろう。アタヤル語には子音 *h* の直後の母音 *i* が音声的に低めに発音され *e* として聞こえる場合もある。そのため *hi* に相当する部分が「ヒ」と表記されたりへと表記されたりしている。母音弱化を受ける前次末音節について音韻的表記ではすべて曖昧母音で表記している。ただしツオレ方言では前次末音節の曖昧母音が *a* に変わる傾向が見られるため (Huang 2018 : 273)、ツオレ方言集落のいくつかではこの母音が *a* であったかもしれない。 *məsəkinut* 型に関しては前次末音節がシで表記されている。直前の子音 *s* は母音 *i* を後続させやすい傾向があるのだろうか⁵。曖昧母音が *i* として聞こえているようである。また *məsəkinut* 型の語末は全てツで表記されているため *c* [tʃ] を表すだろうが、これは語末子音の *t* が音声的に *c* になっているためと考え、音声的表記は *t* とした。また図3は森 (1917) や移川他 (1935) を参照に作成したアタヤル集落の分布を示す地図である (薄いグレーの線は太さ多少に違いがあるがすべて河川を示す)⁶。

表4 20世紀初期のアタヤル集落における「寒い」

スコレック方言		ツオレ方言	
集落名	「寒い」	集落名	「寒い」
Sbtunux	ガヘヤ <i>gəhiya?</i>	Klapay	ラヘヤッカ <i>rəhiyaq</i>
Sqoyaw	ガヒヤク <i>gəhiyaq</i>	Qsya	ラハヤック <i>rəhayaq</i>
South Qsya	カヘヂャク <i>gəhiɕaq</i>	Pelungawan	ガヘラ <i>gəhira?</i>
Hakul	ガヒジャック <i>gəhiɕaq</i>	☆Skikun	ヒーヤク <i>hiyaq</i>
Gawgan	ヒジャック <i>hiɕaq</i>	☆Mnawyan	ヒーヤク <i>hiyaq</i>
Tranan	ヒジャック <i>hiɕaq</i>	Pskwalan	ヒーヤック <i>hiyaq</i>
Slamaw	ヒヤク <i>hiyaq</i>	Knazi	ヒジャク <i>hiɕaq</i>
☆Pyanan	ヒーヤク <i>hiyaq</i>	Rinax	ヤハッカ <i>yahaq</i>
Banun	ハエツヤク <i>hiyaq</i>	Mepainux	ガヘヤック、シキノツ <i>gəhiyaq, səkinut</i>
Skaru	ヒーヤック <i>hiyaq</i>	Gawng Maaw	シキヌツ <i>səkinut</i>
		☆Pyahan	ヒキノツ <i>həkinut</i>
		Cyubus	タラット <i>tələtu</i>
スコレック方言・ツオレ方言混合			
集落名	「寒い」	集落名	「寒い」
Mb'alā	シキノツ <i>səkinut</i>	Mesaulay	シキノツ <i>səkinut</i>

⁵Ochiai (2018b: 136) は鳥居龍蔵が1900年頃に収集したセデック語資料 (鳥居1900a, 1900b) を音韻的に表記し直したが、そこにも同様の現象が見られる。つまり前次末音節またはそれより前の音節において、本来曖昧母音で現れることが期待される母音の子音 *s* の直後で *i* として記録されている。

⁶Mnawyan 集落は図3 (1910年代) では上流側に位置するが、図2 (1990年代) では下流に移住した。

図3 アタヤル集落の分布

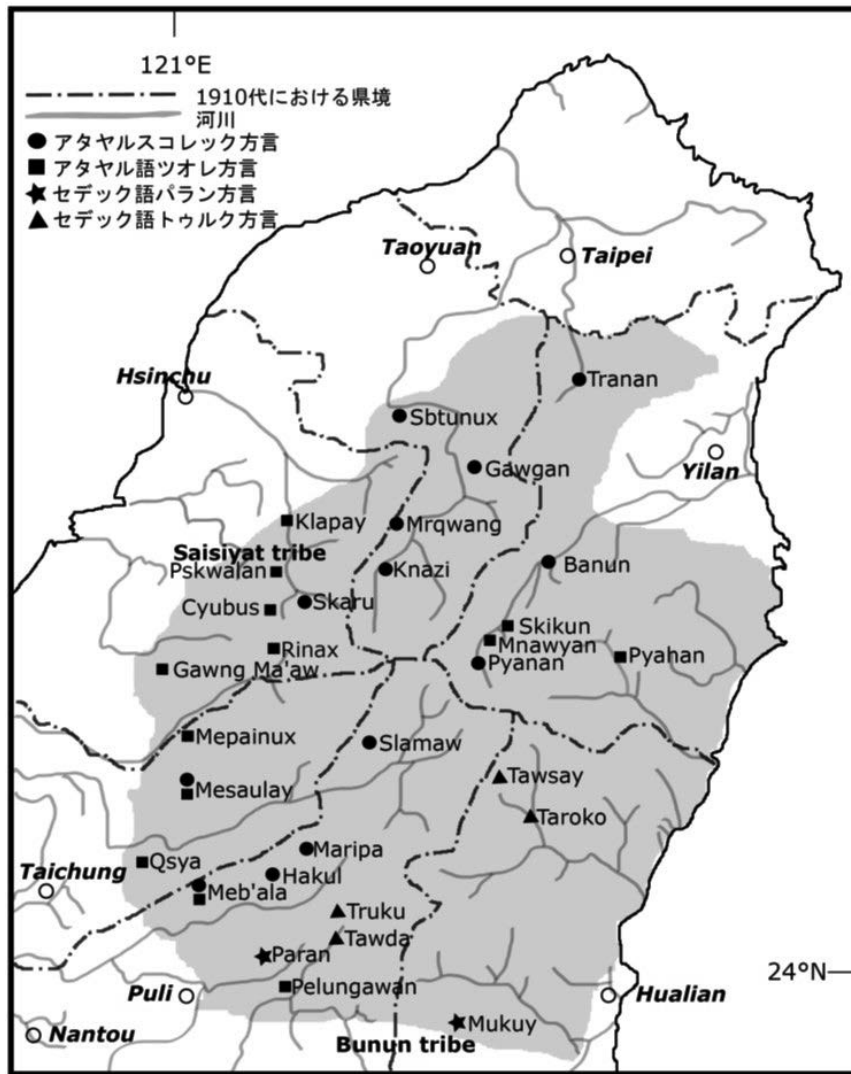


表2と表4において見られる3つの型とそれぞれの型が用いられる方言について表5にまとめた。表4によるとスコレック方言集落に見られるのは *gəhiraq* 型のみである。この形式と同一の形式は Sqoyaw 集落に見られる。Slamaw 集落、Pyanan 集落、Banun 集落、Skaru 集落では *gəhiyaq* から前次末音節が脱落した *hiyaq* として現れる。Sbtunux 集落の形式はカタカナ表記では語末子音が見られないが、語末子音の *q* が失われたというよりも *ʔ* に

変化したと考えた。Li (1981: 248-249) によると *q* から *ʔ* への変化はツオレ方言に一般的に見られる。South Qsya 集落と Hakul 集落では語中の *y* が *ɟ* で現れる。これは2節で述べたようにアタヤル祖語 **r* に遡る子音であり、早期の形式は **gəhiraq* と再建される。Gawgan 集落と Tranan 集落では *gəhiɟaq* から前次末音節が脱落した形式 *hiɟaq* として現れる。

表5 表4 (佐山 1983a、1983b) と表2 (李 1996) のまとめ

	佐山 (1983a、1983b)	李 (1996)
スコレック方言	<i>gəhiraq</i> 型	<i>gəhiraq</i> 型、 <i>tələtu</i> 型
ツオレ方言	<i>gəhiraq</i> 型、 <i>məsəkinut</i> 型、 <i>tələtu</i> 型	<i>gəhiraq</i> 型、 <i>məsəkinut</i> 型

ツオレ方言集落には *gəhiraq* 型と *tələtu* 型と *məsəkinut* 型の3つが見られる。*tələtu* 型は Cyubus 集落で使われる。*tələtu* 型は表2ではスコレック方言集落の側に見られたが、表4でツオレ方言集落にも見られることが分かったため、方言に関わらず *tələtu* 型は見られることになる。2節で述べたように *tələtu* 型は本来「(物体が) 冷たい」を意味する語であり、それがいくつかの集落では「(天候が) 寒い」の意味にも使われるようになったと考えられる。このような意味的拡張はスコレック方言とツオレ方言の両方において起きた。

ツオレ方言集落における *gəhiraq* 型はそのままの形式が Mepainux 集落に見られる。ただし Mepainux 集落には *məsəkinut* 型もある。Skikun 集落、Mnawyan 集落、Pskwalan 集落ではそこから前次末音節が脱落した *hiyaq* が見られる。Knazi 集落では語中子音の *y* が *z* として現れる。Klapay 集落では語頭子音が *r* になった *gəhiyaq* が現れる。これは Qsya 集落の形式である *rəhayaq* でも同様であるが、この形式はカタカナ表記に従えば何故か *h* の直後の母音が *i* はでもなく *a* で現れるようである。落合 (2020a : 64-66) によるとこのように *r* と *g* で揺れる子音はセデック語にも見られ、この子音はアタヤル語群祖語 **R* に遡る。そのため *gəhiraq* 型の早期の形式として再建された **gəhiraq* はさらに **Rəhiraq* に遡ることになる。Rinax 集落の *yahaq* は、*y* と *h* の音位転換が起きているのではないだろうか。本来は *hayaq* であったと考えられる。そうだとすると次末音節の母音が Qsya 集落の形式と同様に何故か *i* から *a* に変わっている。この *i* から *a* への変化は表2の Habun Bazinuq 集落 (スコレック方言) に見られた次末音節における過度な曖昧母音化と関連しているかもしれない。アタヤル語において弱化し

た音節は曖昧母音で現れるが、Huang (2018 : 273) によるとツオレ方言ではこの弱化音節の曖昧母音が *a* として現れる傾向がある。そのため過度の母音弱化を受けた (*rə*) *həyaq* の次末音節の *a* が、Qsya 集落と Rinax 集落では *a* になったのだろう。

ツオレ方言集落において *məsəkinut* 型は Gawng Maaw 集落にそのままの形式が見られる。Pyahan 集落では語頭の *s* が *h* に変わっている。スコレック方言・ツオレ方言混合集落の Mb'ala 集落と Mesaulay 集落においても *səkinut* が見られる。表2において *məsəkinut* 型はツオレ方言集落にのみ見られることから、Mb'ala 集落と Mesaulay 集落はツオレ方言系の *məsəkinut* 型を採用していると考えられる。

表5から分かるのはスコレック方言では *gəhiraq* 型を用いていること、ツオレ方言では *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型の両方を用いていること、*tələtu* 型はスコレック方言とツオレ方言の両者に見られることである。

落合 (2021 : 147) はツオレ方言集落にはスコレック方言の形式が借用されている場合があることを述べている。「寒い」の例でそれを示しているのが Mepainux 集落であり *məsəkinut* 型と *gəhiraq* 型が併存している。多くのツオレ方言集落では本来の *məsəkinut* 型を失いスコレック方言の *gəhiraq* 型に取り換えたと考えられる。表6にアタヤル語の方言において「寒い」を表す3つの型がどのように分布するかまとめた。

5節ではアタヤル語スコレック方言に見られる *gəhiraq* 型 (早期の形式 **Rəhiraq*) の由来について、6節はアタヤル語ツオレ方言に見られる *məsəkinut* 型の由来について、7節ではスコレック方言とツオレ方言の両方に見られる *tələtu* 型の由来について考察する。

表6 アタヤル語の方言別と「寒い」の形式

	<i>gəhiraq</i> 型	<i>məsəkinut</i> 型	<i>tələtu</i> 型
スコレック方言	✓	✗	✓
ツオレ方言	✓	✓	✓

5. アタヤル語の *gəhiraq* 型の由来

この型の由来を探る上で手がかりとなるのが、原住民族委員会 (2012) にアタヤル語ツオレ方言の Rinax 集落の形式として挙げられた「北」を表す語である *gihaq* である。そして同集落にはそれに形式上よく似た形式 *kagihaaq* も原住民族委員会 (2012) に見られ、意味は「寒い」である。「寒い」の形式は *ka-* が接頭辞であると考えられる。語根は *gihaaq* になり、これは *gəhiraq* 型に属する。この接頭辞は 2 節において Kulu 集落の「寒い」の形式 *kə-lətu* に付いている接頭辞と同じものであり、静態動詞を表す。上述のようにツオレ方言では音声的に弱い音節に当たる前次末音節より前の母音が *a* ではなくて *a* で現れることもあるため、Rinax 集落の当該形式では前々次末音節に当たる位置に現れる接頭辞 *ka-* の母音が *a* になっているのだろう。ただ不思議な点は、前次末音節の母音は *i* であり、弱化を受けていない形式で現れていることである。この母音 *i* は本来の母音、つまり歴史的により古い形式の母音を保存していると考えられる。

もう 1 つ不思議な点は、表 4 において 20 世紀初頭に収集された Rinax 集落の「寒い」は *yahaq* (*hayaq* からの *h* と *y* の音位転換) であるのに対し、原住民族委員会 (2012) では語根が *gihaaq* である。前者では前次末音節が落ちているのに対し、後者では保存されている。また前者では音位転換前の形式において語中に *y* を持つが、後者では *y* が見られない。なぜこのような形式上の違いが生じたのかは不明だが以下のようなことがあったのかもしれない。20 世紀初頭の時代に両方の形式を持っていたが片方だけ (*yahaq*) が記録され、その後 *yahaq* は使われなくなり *gihaaq* が残った。

Rinax 集落における *gihaq* 「北」と *gihaaq* 「寒い」は形式的にも意味的にも共通点が見られる。形式上、

gihaaq は *gihaq* の語末音節に対し母音 *a* をひとつ余計に持っている。意味上、「北」に行くほど「寒い」という関連もある。これらから、*gihaaq* 「寒い」は *gihaq* 「北」を語根として派生されたのではないかと考えられるのである。ただここで疑問になるのは落合 (2016a) がセデック語において「東」「西」「南」「北」を表す語は本来存在しなかったと述べていることであり、アタヤル語においてもそうであるはずである。だとすればアタヤル語の *gihaq* 「北」は何を意味していたのだろうか。その手がかりになるのがセデック語の同源語である。セデック語パラン方言に *rihaq* 「山の裏側」という語があり、これが *gihaq* の同源語だと考えられる。この語は落合 (2016a: 32) においても、セデック族によって北の方角を表す語の 1 つとして援用されていると述べられている。アタヤル語の *gihaq* とセデック語の *rihaq* は語頭子音が *g* か *r* かで異なるが、上述のようにこのような子音はアタヤル語群祖語の *R に遡る。そのためアタヤル語群祖語の形式は *Rihaq または *Ribaq と再建される。意味は「山の裏側」である。2 つの形式を建てなければいけないのは語中子音がアタヤル語では *h*、セデック語では *b* でありどちらかに決められないためである。アタヤル祖語は *Rihaq、セデック祖語は *Ribaq となる。

ここまでアタヤル語の *gihaq* 「北」の由来について本来は「山の裏側」を意味していたことを述べた。次に Rinax 集落に見られる形式 *gihaaq* 「寒い」が、*gihaq* を語根として接中辞の挿入により派生されていることを述べる。Li (1985) によればアタヤル語群は意味の不明な特殊な接中辞を持ち、そのアタヤル語群祖語における形式は *⟨ra⟩ である。この接中辞は語末音節における母音の直後に挿入される。Rinax 集落の場合、この接中辞の反映形は *r が脱落して ⟨a⟩ として現れる⁷。Rinax 集落において、語根である *gihaq* に接中辞 ⟨a⟩ が挿入されたなら、*giha⟨a⟩q* として現れるはずであり、この形式は

⁷Li (1981: 265) によると、Rinax 集落では同一母音間で *r に遡る子音が脱落するとある。この場合は古い形式である *giha⟨ra⟩q において、子音 *r が同一母音 *a に挟まれているので、Li (1981) の述べる音韻変化により *r が脱落したと考えられる。

gihaaq「寒い」に一致する。このような接中辞 *⟨ra⟩ の挿入が *gəhiraq* 型を持つ他の集落でも起きたとすれば、*r はほとんどのアタル集落において *y* に変わったため接中辞は ⟨*ya*⟩ として現れるはずである。そして実際 *gəhi<ya>q* 型には語末音節の前に ⟨*ya*⟩ が挿入されていると考えられるのである。

ただし多くのアタル集落で見られる「寒い」の形式である *gəhi<ya>q* に至るまでにはその他の音変化も起きていることになる。語根は *gihaq*「北」(古くは「山の裏側」)であり、そこに *⟨ra⟩ が挿入されると **giha<ra>q* になる。ここから前次末音節の母音弱化が起きて *gəha<ra>q* になるはずであるが、実際に得られた形式 *gəhi<ya>q* では次末音節の母音が、期待される母音である *a* ではなくて *i* になっている。ここには上でも述べた過度の曖昧母音化が関連していると考えられる。恐らく早期の形式は *gəha<ra>q* であっただろうが、アクセントが次末音節から語末音節に移るに従って、次末の *ha* が弱い音節と捉えられるようになり、母音 *a* が *a* に弱化して *gəhə<ra>q* になったのではないか。この母音弱化が起きた段階を留めていると考えられるのが表2の Habun Bazinuq 集落の形式 *hə<za>q* である。そして *gəhə<ra>q* において *r* の直前の *a* が *i* に変わったと考えられるのだが、これは *r* が *z* へと変化し *gəhə<za>q* となった後で、またはさらに *y* へと変化し *gəhə<ya>q* となった後で起きたのだろう。子

音 *y* の前において *a* が *i* に変わるのと同化の一種と考えられる。実際にアタル語に類似の音変化が見られる。例えばアタル語の *hii*「体、実」という形式がある。セデック語パラソ方言での同源語は *hei* であり、次末音節の *e* は *a* に遡ることから早期の形式は *hai* である⁸。そのためアタル語の *hii* では語末母音 *i* の前で直前の *a* が *i* に同化したと考えられる⁹。このような類例があるため *gəhə<ya>q* から *gəhi<ya>q* へと *y* の直前の *a* が同化して *i* になったと言えそうである¹⁰。しかし、表4における South Qsya 集落と Hakul 集落の *gəhi<za>q*、Gawgan 集落と Tranan 集落の *hi<za>q* では子音 *z* の前でも *i* で現れている。これは子音 *z* が音的に *y* に類似していることを示唆しているだろう。そのため *y* と同様に直前の *a* を *i* に変える働きを持っているのだろう。ただし Habun Bazinuq 集落の形式 *hə<za>q* のように *i* への変化の見られない形式もある。

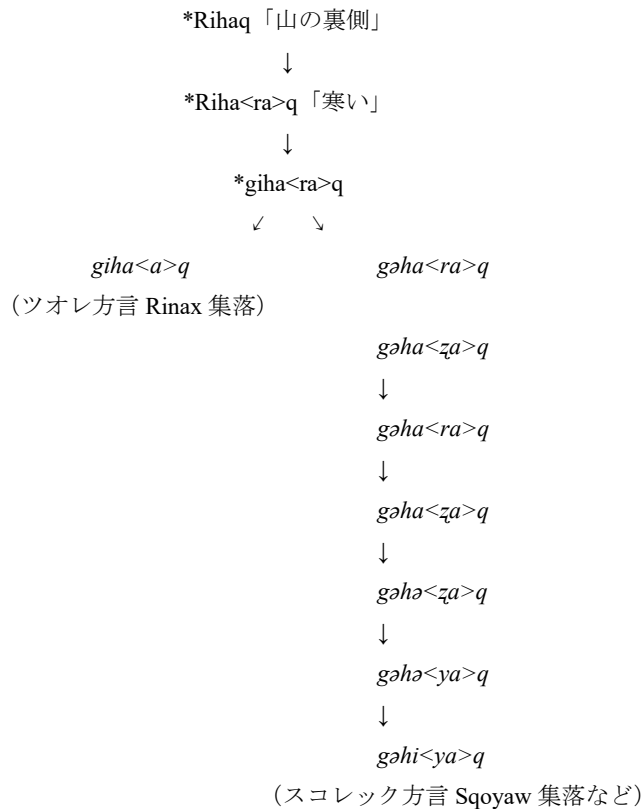
ここまで *gəhəyaq* 型の由来と、関連する音変化について説明した。アタル祖語の *Rihaq「山の裏側」(転じて「北」)が基となっている。これに対し、接中辞 *⟨ra⟩ を挿入した *Riha<ra>q という形式が派生され「寒い」を意味する語となった。この形式は様々な音変化を経て *gəhəyaq* 型に代表される形式を持つに至った。*Rihaq「山の裏側」から *gəhəyaq* 型に至るまでの変化を図4にまとめた。

⁸Egerod (1980 : 165) では *hi?* だが語末の *?* は音的な現れと考えた。またセデック語パラソ方言の形式 *hei* から考えて母音は単母音ではなく複母音であると分かるため、*hii* のように同質の母音が並んでいると考えた。因みに小川 (1931 : 89) ではアタル語の同形式が *hei* と表記されている。これは *h* の直後の *i* が音的な母音の低下を受けて *e* に変わったものである。

⁹1920年代に収集された小川・浅井 (1935 : 578) のセデック語パラソ方言語彙では当該形式が *he:di* として挙げられていることから、母音間に子音が存在していたことがわかるが、セデック語においてもアタル語においてもこの子音は消失した。

¹⁰アタル語の *hii*「体、実」も *gəhi<ya>q*「寒い」も次末音節における *a* が後続の *i* または *y* に同化している。類例はセデック語トゥルク方言にも見られる。落合 (2016b:304) は語末音節がセデック祖語の二重母音 *əy に由来する語の場合、セデック語トゥルク方言において接尾辞が付き二重母音の前部要素 *ə が次末音節に移動するとこの母音が *i* に変わると述べる。これは後続する *y* への同化と考えられる。アタル語、セデック語トゥルク方言ともに、次末音節において曖昧母音の後続の *y* (または *i*) への同化が起きている点が共通している。

図4 アタヤル祖語 *Rihaq 「山の裏側」から *gəhəyaq* 型「寒い」に至るまで



6. アタヤル語の *məsəkinut* 型の由来

前節で *gəhəyaq* 型は本来アタヤル語群祖語で「山の裏側」を意味した語である *Rihaq (アタヤル祖語の形式) からの派生であることを述べた。だとすればアタヤル祖語において本来「寒い」を表す語は上記の2つ以外の形式ということになる。その候補として挙げられるのが *məsəkinut* 型である。

アタヤル祖語で *məsəkinut* 型が本来「寒い」を表す形式だとしたら、この形式はセデック祖語で「寒い」を表す語根形式である *səkuy または *səkəy と関係があるのだろうか。少なくとも *məsəkinut* の語根である *məsəkinut* において、語頭の音配列 *sək* までは一致しているがそれより後の音配列は一致していない。

ここで考えられるのが接尾辞の付加の可能性である。4節では機能の不明な接中辞 *<ra> について議論したが、Li (1985) によるとアタヤル語群には接中辞の他に機能

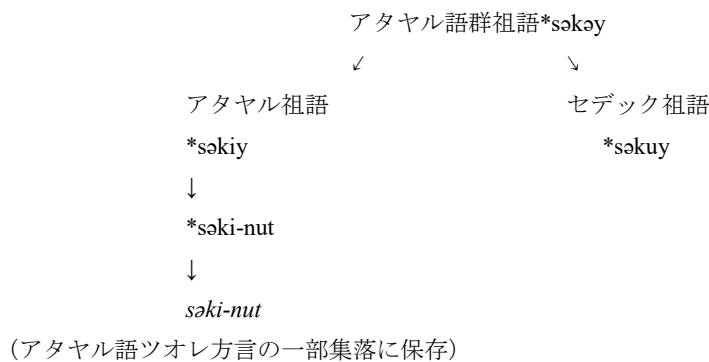
の不明な接尾辞も見られる。そのような接尾辞には多様な形式が見られ、小川・浅井 (1935 : 25 -26) では *-niq* や *-gal* など 10 以上の形式が挙げられている。これらの接尾辞は音節構造としては 1 音節であり、CVC または CV という構成である。その中に *-nux* という形式がある。例えばオーストロネシア祖語 *batu は「石」を意味する語だが (Wolff 2000 : 759)、Li (1981 : 294) によるとアタヤル語群祖語では **-nux* を付加し **batu-nux* となる。この *-nux* と形式上よく似ているのが *məsəkinut* 型の語尾に見られる *-nut* である。*məsəkinut* 型から *-nut* を除けば *səki* が残るが、これが「寒い」の語根だろうか。だとしてもセデック祖語の *səkuy または *səkəy とは語尾が異なる。まずセデック祖語の形式に見られる語末子音の *y がアタヤル語の語根と考えられる *səki* には見られない。これには接尾辞の付加に伴う語根末の消失が関わると考えられる。例えばオーストロネシア祖語に *kaSiv という形式があり意味は「木」であるが (Blust and

Trussel 2010)、これはアタヤル語群祖語の早期において *kahuy と反映される (Li 1981 : 248)。その後この形式に対し *-niq という接尾辞が付くのだが、その際に語末子音の *y* が削除されて *kahu になった形式に対して *-niq が付き、Li (1981 : 248) によるともう 1 つのアタヤル語群祖語では *kahu-niq となる。そして例えばアタヤル語スコレック方言では *kəhuniq* となる (小川 1931 : 96)。このような語末子音の *y* の消失がアタヤル語の *məsəkinut* 型に対し *-nut* が付加する過程で起きたのではないだろうか。語根はアタヤル祖語においてもセデック祖語と同一形式だったとすれば *səkuy に対し *-nut* が付加する際、語末子音の *y* が脱落した *səku- に付加したら、*səku-nux という形式が生じる。もう 1 つのセデック祖語の形式である *səkəy に対し *-nut* が付加する際、語末子音の *y* が脱落した *səkə- に付加したら、*səkə-nux という形式が生じる。このようにして生じた *səku-nux と *səkə-nux のどちらの形式も、実際に得られる形式であ

る *məsəkinut* 型と比べると次末音節の母音が一致しない。実際の形式では *i* であるのに対し、仮定上の形式では *u* または *ə* である。

ここで考えられる可能性が 4 節で議論した *y* の直前における *a* の *i* への変化である。セデック祖語の形式はこれまでのデータにより *səkuy または *səkəy が建てられたが、アタヤル語の形式 *səkinut* を考え合わせると、後者の方が祖形として正しい形式だと判断されそうである。後者の形式 *səkəy では語末子音 *y* の直前が *a* である。アタヤル祖語もこの形式を「寒い」を表す語として持っていたが、*y* が直前の *a* に同化を引き起こし *səkəy から *səkiy になったのではないか。そして *səkiy から語末子音の *y* を取り除いた形式 *səki に対し接尾辞の *-nut* が付き、*səki-nut が生じたのだろう。まとめるとアタヤル語群祖語において本来「寒い」を意味していた語は *səkəy ということになる。この祖形からセデック語、アタヤル語に至るまでの変化を図 5 にまとめた。

図 5 アタヤル語群祖語 *səkəy 「寒い」から *səkinut* に至るまで



7. アタヤル語の *təlatu* 型の由来

təlatu 型の由来と変遷を考える材料として、小川 (2006) を取り上げたい。小川 (2006) では、小川自身が 1920 年代から 1930 年代にかけて台湾において収集した台湾オーストロネシア諸語の基礎語彙をまとめた資料であり、その頃の時代に、小川以外の人物が台湾において収集した語彙や、台湾オーストロネシア諸語の資料もその時代以前に出版された資料からの語彙も含まれる。小川

(2006 : 488-489) 語彙項目の 1 つに「寒 cold」が挙げられている。そこに挙げられた形式と注釈などを表 7 に示す。「寒 cold」については 20 の資料からの形式が挙げられている。アクセントなどを示すと考えられる符号が付いている場合は小川 (2006) の表記のままに表示した。各形式の左列に 1a から始まり 18 で終わる番号が振られているが、これは小川 (2006) が用いた資料番号である¹¹⁾。

表7 小川 (2006 : 488-489) に見られるアタヤル語の「寒い」関連の語

1a	gahiyaq, mahayaq; taratu (ツメタイ)	8	hayak, kaiya, muhaiyak; tereto ツメタイ
1b	hijak; telito (冷)	9	hayak
1c	haiyak 寒冷, telato 涼, telat ksha 冷水 (液)	10	heyak
1d	mahijak, sāgun 涼ム, bassao 冷す, basāgun 冷す, telit 冷カイ	13a	rehak ¹²
1e	gahiak, gahijak, massao 冷イ, bassui 冷 セ	13b	makisinot; 寒冷, telato 涼, telat ksha 冷水 (液)
3	hejak, hajak	14	sekinut; terato (ツメタイ)
4	hai-ak	15	sikinut
5a	hahyack, haiyak	16	hayak
5b	masikinot 寒冷, telato 涼, lahaeya; haiyak 冷	17	hayakun
6	hāyák	18	maskenut

まず表7において最も多く見られる語は *gəhiraq* 型である。資料番号 15 と 18 を除く全ての資料で見られる。これらの資料はスコレック方言を話す集落で収集されたと推察される。または、本来はツオレ方言の集落だが、スコレック方言化を受けて *gəhiraq* 型を取り入れた集落で収集されたと推察される。次に、*gəhiraq* 型よりも少ないが *masəkinut* 型も見られる。この型を示す形式は太字で示している。資料番号 5b、13b、14、15、18 で見られる。これらの集落はツオレ方言を話す集落だと推察されるが、これら資料の中 5b では *masəkinut* 型の他に

gəhiraq 型も見られることから、5b はツオレ方言とスコレック方言の混合集落の可能性もある。

さらに、表7には本節の主眼である *təlatu* 型も見られる。*təlatu* 型が現れる際には必ず注釈が付け加えられている。このように注釈を必要としたのは、*təlatu* 型が「寒い cold」の意味と関連しながらも、異なる意味を持つことを示そうとしたためと見受けられる。*təlatu* 型を示す箇所は影を付けた。資料番号 1a、1b、1c、1d、5b、8、13b、14 で見られる。注釈を見ると、5b と 13b における「涼」を除き、全て「冷(たい)」を表していることがわかる。

¹¹ 資料番号の出典は小川 (2006:ix) を基にすると以下であると思われるが、不明な資料も少なくない。伊能 (1998) は資料として複数回現れるが、これらは語彙を採取した集落が異なっていることを示す。1a (小川 1931)、1b (丸井 1915)、1c (「飯島」とあるが資料は不明、著者は飯島幹太郎氏だと思われる)、1d (「渡辺」とあるが資料は不明、著者は渡辺栄次郎氏だと思われる)、1e 佐佐木 (1918)、3 (「緒方」とあるが資料は不明)、4 (Guérin 1868)、5a (Dodd 1882)、5b (「飯島」とあるが資料は不明、著者は飯島幹太郎氏だと思われる)、6 (Schetelig 1868)、8 (伊能 1998 [調査は 1897 年]) 9 (伊能 1998)、10 (伊能 1998)、13a (伊能 1998)、13b (「飯島」とあるが資料は不明、著者は飯島幹太郎氏だと思われる)、14 (中西 1900) 15 (「中西」か「森(丑之助)」とあるがどちらかは不明。資料も不明。中西は中西潔氏だと思われる)、16 (伊能 1998)、17 (伊能 1998)、18 (伊能 (1998) または「杉山(文悟)」とあるが、どちらかは不明。杉山氏の資料も不明。)

¹² 伊能 (1998 : 163) によるとこの形式は Watoan 集落で収集されたものであるが、佐山 (1983b : 199) に挙げられた Rinax 集落の形式「ヤハッカ」(表 4) に酷似している。これは Watoan 集落と Rinax 集落の密接な関係を裏付ける 1 つの証拠を示している。

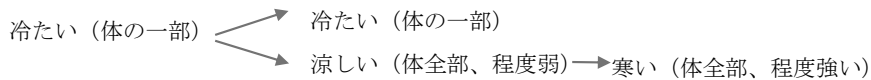
1c と 13b には *təlatu* 型を含む名詞句 *təlatu qəsiya* (音韻的表記への変換は本稿筆者による) が見られ、「冷たい水」を表しているという¹³。このように *təlatu* 型が挙げられたほとんどの資料において、「冷たい」の意味が付されている。*təlatu* 型が意味する「冷たい」は、体全体に受ける冷感を表す *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型(ともに「寒い」の意味)とは異なり、体の一部に受ける冷感を表す。

資料番号 5b と 13b では *təlatu* 型に「涼」(「涼しい」を表すと考えられる)の意味が付されている。「涼しい」という意味であれば、体全体に受ける冷感を表すと言えるだろう。*təlatu* 型は上記のように体の一部で感じる「冷たい」のほかに、体全体で感じる「涼しい」の意味もあるようだ。資料番号 13b については、*təlatu* 型に対し「冷たい」と「涼しい」のどちらの意味も挙げられている。「涼しい」は、体全体で感じるもう 1 つの冷感を表す語「寒い」よりも、冷感の程度が弱いと言える。

セデック祖語の同源語 *tə-ləətə (> *tə-ləətu) が「冷たい」の意味として再建されることから、アタル

語においても本来 *təlatu* 型は「冷たい」を意味していたと考えられる。表 7 でも「冷たい」の意味で用いられている場合が多い。アタル語において本来この語は体の一部で受ける冷感「冷たい」を表していたが、それが後に体全体で受ける冷感「涼しい」をも表すようになったのではないか。アタル語において「寒い」を表すには *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型が用いられるが、冷感の程度が低い「涼しい」を表す語は存在していなかったのかもしれない。*təlatu* 型が本来の意味である「冷たい」から意味的をさらに拡張して、「涼しい」を表すようになったのではないか。実際、セデック語パラン方言において「涼しい」を表す語は見られず、日本語の借用語 *suzusi* を用いているほどである。しかも、その後さらに *təlatu* 型が「涼しい」から「寒い」へ冷感の強度を上げたと考えられる。3 節における李 (1996) の記録と 4 節における佐山 (1883b) の記録では *təlatu* 型が「寒い」の意味で挙げられているからである。アタル語における *təlatu* 型の意味的変遷を図 6 にまとめる。

図 6 アタル語における *təlatu* 型の意味的変遷



アタル語の *təlatu* 型について、アタル祖語の形式を考えてみる。セデック祖語は *tə-ləətə (> *tə-ləətu) であった。前次末音節と次末音節において *əə という母音連続が見られる。アタル語における *təlatu* の語例を見渡すかぎり、セデック語に見られるような母音連続は見られない。同一母音の母音連続 *əə から同音脱

落が起きて *a* が 1 つだけになった可能性がある。アタル語群祖語の形式が *tə-ləətə だとすれば、アタル祖語では同音脱落が起き、*tə-lətə になってその後語末母音が *u* に変わって *tə-lətu を得たことになるだろう¹⁴。

さらに、表 7 において資料番号 1d と 1e に *gəhiraq* 型でも *məsəkinut* 型でも *təlatu* 型でもない形式が現れる。

¹³Huang (1993 : 16) によるとアタル語 (スコレック方言) において、静態動詞とそれによって修飾される名詞の語順は、名詞が前で静態動詞が後の場合もあれば、静態動詞が前で名詞が後の場合もあるという。表 7 の「冷たい水」の例では後者の語順を採っている。

¹⁴ただし、語根が *ləətə であるのは、アタル語群の典型的な語根としては異質である。アタル語群において典型的な語根は 2 音節から成るが、*ləətə は 3 音節である。そのため語頭 *lə- は何らかの接頭辞であったのではないかと考えられないこともないが、今のところは判断できない。

これらに下線を引いて示した。小川（1931：151）に挙げられた当該形式の語根は *basaw* である¹⁵。1d において下線を引いた語の 2 つ目の語はこの形式を表している。動作主態では *masaw* となる（本来なら接中辞 <əm> が付くが、語頭が唇音 *b* の場合は鼻音代替が起きて *b* が *m* に置き変わる）¹⁶。1e において下線を引いた語の 1 つ目はこの形式を表している。この形式の意味は小川（1931:151）によると「冷ます」（例えば湯など）である。非動作主態・場所主語では接尾辞 *-an* が付いて *bāsaw-an* となる。この形式も小川（1931：151）に挙げられている。だとすれば非動作主態・対象主語では接尾辞 *-un* が付いて *bāsaw-un* になるはずである。これに相当する形式が 1d において下線を引いた 3 つ目のもの *basāgun* と考えられる。ただし、この表記を見る限り、語根末子音に相当する接尾辞の直前の子音は *g* で現れているため、音韻的表記は *bāsag-un* になるだろう。以下本節において *basāgun* のような立体は小川（2006）における表記、*bāsag-un* のような斜体は本稿筆者による解釈を加えた音韻的表記を示す。次に、1d において下線を引いた 1 つ目のもの *sāgun* は *bāsaw-un* から前次末音節 *bə* が脱落した *sag-un* という形式を示しているのだろう¹⁷。1e において下線を引いた 2 つ目の語は *bāsaw-i* を表していると考えられる。これは非動作主態・命令法を表す接尾辞 *-i* が付加したものである。

セデック語にこの同源語が見られる。セデック語パラ

ン方言では *baso* であり、意味は「調理直後の熱い食物を常温に放置することで冷ます」である。接尾辞の付いた形式は例えば *busag-un*「冷ます」である。Rakaw 他（2006：92）によるとセデック語トゥルク方言は *basaw* であり、意味は「調理し終わったものを器に盛る」である。接尾辞の付いた形式は例えば *bāsag-i*「調理し終わったものを器に盛れ」（Rakaw 他 2006：92）である。アタヤル語の同源語との意味の共通項を鑑みれば、この語は本来「（調理したての熱い食物を）冷ます」という意味であったと思われる。

この「冷ます」を表す語の接尾辞の付いた形式について、*bāsaw-an*（小川 1931：151）では語根末子音が *w* のままであるのに対し¹⁸、1d の *basāgun* (*bāsag-un*) では語根末子音が *w* から *g* に変わっている。セデック語において接尾辞が付いた形式ではパラン方言 (*busag-un*) とトゥルク方言 (*bāsag-i*) とともに語根末子音の *w* が *g* に変わっている。接尾辞の付いた形式が歴史的に古い音素を保っているなら、アタヤル語群祖語として建てられる形式は **basag* となり、意味は「（調理したての熱い食物を）冷ます」となる。セデック語でもアタヤル語でも語根末の **g* が *w* に変わる変化が起きたと考えられる。小川（1931：151）の *bāsaw-an* のように接尾辞が付いた形式において語根末子音が *w* で現れる場合、母音間において *g* が *w* へ変化する一種の弱化が起きたのかもしれない¹⁹。表 8 にアタヤル語群祖語において「（調理したての熱

¹⁵ この語根に対し静態動詞を表す接頭辞 *mə-* の付いた形式 *mə-basaw* が小川（1931：152）に「冷める」の意味として挙げられている。

¹⁶ アタヤル語において唇音 *p* や *b* が動作主態を表す接辞として働く *m* に置き換わる語例は Li（1980：363-364、366）にも見られるが、これらを Li（1980）が鼻音代替と見なしているかどうかは明確に述べられていない。

¹⁷ 1e の *sāgun* (*sag-un*) は「涼む」と注釈が付されている。「冷やす」は熱を帯びた物体を対象とする行為であるが、「涼む」は動作主自身が涼感を求める行為である。これに関し、小川（1931:190）のアタヤル語の語彙集には *tsəs-basaw*「涼む」が挙げられている。語根はやはり *basaw* であり、これに接頭辞 *tsəs-* が付いている。1e の形式ではこの接頭辞も語根の第一音節も脱落していることになる。

¹⁸ 表 7 の 1e における *bassui* (*bāsaw-i*) においても、語根末子音 *w* が接尾辞付加後も *w* で現れていると考えられる。

¹⁹ あるいは語根末が *w* に変わった *basaw* において、語根末が歴史的に **g* に遡ることが忘れ去られた結果、語根 *basaw* に直接接尾辞を付けているのかもしれない。

い食物を) 冷ます」を表す語の再建形とそれを導く形式をまとめる。

表8 アタヤル語群祖語 *basaw 「(調理したての熱い食物を) 冷ます」の再建

	語根	接尾辞が付く場合
セデック祖語	*basaw	*basag-
アタヤル語	basaw ²⁰	*basag-, *basaw-
アタヤル語群祖語	*basag ²¹	*basag-

8. おわりに

アタヤル語において「寒い」を表す語には *gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*tələtu* 型の3つの型が見られた。*tələtu* 型はアタヤル語スコレック方言とアタヤル語ツオレ方言の両方の集落に見られた。*gəhiraq* 型はアタヤル語スコレック方言集落に見られる形式だが、アタヤル語ツオレ方言集落にも見られる。*gəhiraq* 型がアタヤル語ツオレ方言集落に見られる場合は、アタヤル語スコレック方言を取り入れたためだと考えられる。*məsəkinut* 型はアタヤル語ツオレ方言にのみ見られる。

セデック語との比較によりこれらの由来を探った結果、*tələtu* 型は本来「冷たい」を意味する語であることが分かった。*gəhiraq* 型は本来「山の裏側」を意味した

語 *Rihaq (アタヤル祖語の形式) から、接中辞 *<ra> の挿入によって派生された。そのため本来アタヤル語において「寒い」を意味する語は *məsəkinut* 型である。そしてこの型はセデック祖語において「寒い」を表す形式 *səkəy との同源語である。*məsəkinut* 型は語根 *səkəy に対し接尾辞 *-nut を付加することで作られている。現在、アタヤル語の *məsəkinut* 型はアタヤル語ツオレ方言集落の一部に残されているのみである。アタヤル語スコレック方言集落では改新された形式である *gəhiraq* 型を用い、また多くのアタヤル語ツオレ方言集落では「寒い」を表す本来の形式である *məsəkinut* 型をアタヤル語スコレック方言で改新された形式である *gəhiraq* 型に取り換えた。以上からアタヤル語群祖語において「寒い」と「冷たい」を表す語を再建すると表9のようになる。

表9 アタヤル語群祖語における「寒い」と「冷たい」の再建

	「寒い」	「冷たい」
アタヤル祖語	*səkiy	*tə-lətə > *tə-lətu
セデック祖語	*səkuy	*tə-ləətə > *tə-ləətu
アタヤル語群祖語	*səkəy	*tə-ləətə

²⁰ この形式が見られた表7の資料番号 1e と 1d はアタヤル語スコレック方言を記録した可能性が高い。またこの形式を挙げている小川 (1931) はスコレック方言の語彙集である。このことから、表8のアタヤル語の形式はスコレック方言を示すものとして挙げた。ツオレ方言における同一形式を探してみたが、管見の限り見つけれなかった。

²¹ 語末 *g は *R に由来するので *basaR と表記できる。

参考文献

- 安部清哉 (1985) 「温度形容語彙の歴史-意味構造からみた語彙史の試み-」『文芸研究』108 : 39-51.
- Blust, Robert and Stephen Trussell (2010) *Austronesian Comparative Dictionary, Web Edition*. <<http://www.trussell2.com/ACD/>> (最終閲覧日 2021年1月)
- Dodd, John (1882) A few ideas of the probable origin of the hill tribes of Formosa. *Journal of the Straits Branch, Royal Asiatic Society* 10: 195-211.
- Egerod, Søren (1980) *Atayal-English dictionary, vols. I-II*. London: Curzon.
- 原住民族委員會 (2013) 『原住民族語 E 樂園』 <<http://web.klokah.tw/>> (最終閲覧日 2022年1月) .
- Guérin, M. (1868) *Du dialecte Tayal ou aborigène de l'île Formose*. Bulletin de la Société de Géographie 16: 466-495.
- Huang, Hui-chuan J. (2018) The Nature of Pretonic Weak Vowels in Squiliq Atayal, *Oceanic Linguistics* 57.2: 265-288.
- Huang, Lillian M. (1993) *A Study of Atayal Syntax*. Taipei: Crane.
- Huang, Lillian M. (1995) *A Study of Mayrinax Syntax*. Taipei: Crane.
- 伊能嘉矩 (1998) 『伊能嘉矩：蕃語調査ノート』東京：日本順益台湾原住民研究会 .
- Li Paul Jen-kuei (1980) The phonological rules of Atayal dialects. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 51: 439-405.
- Li, Paul J. (1981) Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica*, 52.2: 235-301.
- Li, Paul J. (1985) The position of Atayal in the Austronesian family, In Pawley, A. and Carrington, L. eds., *Austronesian linguistics at the 15th pacific science congress*, pp. 257-280. Canberra: Pacific Linguistics.
- 李壬癸 [Li, Paul J.] (1996) 『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭：宜蘭縣政府.
- 丸井圭次郎 (1915) 『タイヤル蕃語集』台北：台湾総督府警察本署.
- 森丑之助 (1917) 『臺灣蕃族志-第1巻』台北：臨時臺灣舊慣調査會.
- 中西潔 (1900) 「太湖蕃語集」手稿.
- 落合いずみ (2016a) 「傾斜を軸とするセデック語パラソ方言の民俗方位」『神戸市外国語大学外国学研究』92 : 25-47.
- 落合いずみ (2016b) 「セデック語パラソ方言における語末 uy の交替」日本言語学会 (編) 『日本言語学会第152 回大会予稿集』京都：日本言語学会.
- Ochiai, Izumi (2018a) Historical reduplication in Seediq, *Kyoto University Linguistic Research* 37 : 23-40.
- Ochiai, Izumi (2018b) Ryuzo Torii's Paran Seediq Glossary (1900): Annotation and observation, *UST Working Papers in Linguistics* 10 : 113-143.
- 落合いずみ (2020a) 「アタヤル語群の「上り」と「下り」の起源」『京都大学言語学研究』39 : 137-148.
- 落合いずみ (2020) 「アタヤル語群の文化的語彙 *Ratəd を再建するまで」『島嶼地域科学』1 : 59-73.
- 落合いずみ (2021) 「アタヤル語群における「家」と「屋内」の関連」『島嶼地域科学』2 : 139-162.
- 落合いずみ (2022) 「セデック語トゥルク方言の次末音節における曖昧母音の後続母音への同化」『言語記述論集』14 : 115-130.
- 小川尚義 (1931) 『アタヤル語集』台北：台湾総督府.
- 小川尚義 (2006) 『臺灣蕃語蒐録』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 小川尚義・浅井恵倫 (1935) 『原語による台湾高砂族伝説集』台北：台北帝国大学言語学研究室.
- Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編 (2006) 『太魯閣族語簡易字典』秀林郷：秀林郷公所.

- 佐佐木達三郎 (1918) 『国語ひき蕃語辞典前篇』台北：台湾総督府。
- 佐山融吉 (1983a) 『蕃族調査報告書：大々族前編』台北：南天書局。(初出は1918年)
- 佐山融吉 (1983b) 『蕃族調査報告書：大々族後編』台北：南天書局。(初出は1920年)
- Schtelig, A. (1868) Mittheilungen über die Sprache der Ureinwohner Formosa's. *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft* 5: 435-464.
- 鳥居龍蔵 (1900a) 「台湾埔里社霧社蕃の言語(東部有黥面蕃語)」『東京人類学会雑誌』176: 71-74.
- 鳥居龍蔵 (1900b) 「台湾埔里社霧社蕃の言語(東部有黥面蕃語)」『東京人類学会雑誌』177: 100-104.
- 月田尚美 (2009) 「セデック語(台湾)の文法」東京大学博士論文。
- 移川子之藏・宮本延人・馬淵東一 (1935) 『台湾高砂族系統所属の研究』台北：台北帝国大学土俗人種学教室。
- Wolff, John (2010) *Proto-Austronesian Phonology with Glossary, vols. I-II*. Ithaca: Southeast Asia Program Publications, Cornell University.

a thing.” For *məsəkinut* in C’uli’ Atayal, this paper argues that it is a cognate of the Proto-Seediq *səkəy. This C’uli’ form *məsəkinut* can be separated into two parts: *səki* and *nut*. The former element shows the reflex of *səkəy but the schwa in the final syllable underwent assimilation to the following *y* and became *i* in Proto-Atayal, i.e., *səkiy. The latter element *nut* could be a fossilized suffix. The final consonant *y* is deleted, and the suffix is added, resulting in *səki-nut*. The Proto-Atayalic form is constructed as *səkəy “cold of environment.” The Squaliq Atayal form *gəhiraq* is derived from an Atayal form *Rihaq “the back side of the mountain.” An C’uli’ Atayal form for “cold” is *giha<a>q*, which is analyzed to include a fossilized infix <a>. This infix is known to date back to *<ra>. The Squaliq Atayal form *gəhiyaq* underwent several phonological changes from the earlier form *giha<ra>q*. Finally, the Proto-Atayalic has *səkəy and *tələ(ʔ)ətə/*tələʔtə, which means “cold of an environment” and “cold of a thing,” respectively.

Keywords : Atayal Seediq cold (environment) cold (thing) backside of the mountain

Abstract

Atayalic languages (Austronesian) include two languages Atayal and Seediq. This paper reconstructs Proto-Atayalic form expressing coldness: “cold of an environment” and “cold of a thing.” Atayal has two dialects, Squaliq Atayal and C’uli’ Atayal, and each dialect has a different form for “cold of an environment.” Squaliq Atayal has *gəhiraq* and C’uli’ Atayal has *məsəkinut*, although some villages of C’uli’ Atayal have adopted Squaliq Atayal form. In addition, both Atayal dialects have another form *tələtu* as the word for “cold of environment.” However, the original meaning of *tələtu* is “cold of a things” as this is supported by the cognates in Proto-Seediq *tələətə (> *tələətu), and its meaning “cold of